

青年の自己有能感形成に及ぼす要因の検討 —幼少期の親のしつけと親・教師による賞賛との関連性—

尾形 和男* 増南 太志**

* 名誉教授

** 埼玉学園大学

Examination of Factors Affecting Adolescent Self-competence Formation —Relationship Between Parental Discipline in Childhood and Praise by Parents / Teachers—

Kazuo OGATA* and Taiji MASUNAMI**

*Professor Emeritus of Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

**Saitamagaku University, Kawaguchi 333-0831, Japan

問題と目的

自己有能感は自尊感情と他者軽視の2側面から構成されている概念であり、自尊感情と他者軽視のバランスの在り方は個人の対人関係に大きな影響を及ぼすと考えられる(速水・木野・高木, 2004)。

自尊感情とは自己の能力や価値についての評価的な感情や感覚(山本, 2005)であり、自己肯定感とも同義に用いられることもある。最近の我が国の青年の自尊感情が諸外国の青年に比較して低いことが指摘されており、青年の生き方そのものについて何らかの影響をもたらしているのではではないかと懸念されている。

自尊感情の形成要因そのものについて、生まれ育つ家庭の中での影響に焦点を当てた場合や、あるいは子どもの通う教育機関の友人関係、教師との関係などに焦点を当てた研究がみられる。具体的には、森下・後藤(2016)は児童期の母親の言葉がけが女子大生の自尊感情と他者信頼に及ぼす影響について調べ、母親のポジティブな言葉がけが子どもの自尊感情と他者信頼を高めており、ポジティブな言葉がけは母親自身の感謝の言葉がけを高め、さらにそのことが女子大生の他者信頼を高めることを指摘している。また、井上(2018)は児童期に父・母・教師からほめられることが自尊感情形成にどのような関連性を有するのか検討を加え、母親と教師からほめられる頻度が自尊感情の高低と相関することを明らかにしている。しかもほめられる内容については、礼儀・他者への気遣いと性格・

態度が関連性を有し、一時的な能力や結果よりも時間をかけて継続的に子どもをほめることが自尊感情を高めるとしている。一方、山下・石・桂田(2010)はParker, Tupling, & Brown(1979)が作成したParental Bonding Instrument(PBI)の日本版(小川, 1991)を用いて子どもの頃の親の養育態度と自尊感情の関連について調べ、両親ともに「情愛と自律承認」タイプと「冷淡と干渉」の間に差がみられ、「情愛と自律承認」タイプの方が自尊感情と関連性を有し、愛情や共感だけでなく、過保護にならずに自律を促進する養育態度が重要であることを指摘した。また、渡邊・藤井(2020)は小学校4年生から中学校3年生を対象として、教師・保護者・友人からの賞賛と自尊感情、学校適応感との関連性について分析を加え、教師・保護者・友人からの賞賛は自尊感情を媒介して学校適応感を高めるとしている。そして、細田・田嶋(2009)は中学生の自分と他人に対する肯定感が両親や友人、教師のソーシャルサポートによりどのような影響を受けているのか検討を加えた。結果として、自他への肯定感の高い中学生は両親からのサポートが高く、友人からのサポートは自己肯定感に関連すること、そして教師からの道具的サポート(アドバイスをしてくれる、心配してくれる、話し合う)が高いほど男子において自己肯定感が高いことを報告している。また高井(2011)は、個々の個人の自信形成について「ほめられ経験」「努力・達成経験」「困難克服経験」の3要因の重要性を指摘している。

上述の一連の報告は子どもの自尊感情形成要因とし

て親の養育行動、学校現場での子どもと教師、そして友人との関係に焦点を当てたものであり、いずれも親の関わり方、教師の関わり方の重要性を指摘している。

しかし、自尊感情は本来人間が自己の能力や価値についての評価的な感情や感覚であり（山本, 2005）、自律的に判断できるという健全な側面を持つと考えられるが、社会適応の面からみて必ずしも十分なものではないとする指摘もある（Baumeister, Campbell, Krueger, & Vohs, 2003; Crocker & Park, 2004）。自尊感情は基本的にはポジティブな意味合いを持つのであるが、それが強すぎる場合は他人との関係性においてバランスが取れていない場合もあると考えられる。それは、本来自尊感情は他人との関係性の中で捉えられることが多く、他者への評価を通して成立すると考えられるからである。つまり、自己評価維持モデルや社会的比較理論にも示されているように、他者をどのように認知するかという視点は自分の評価を認知することと不可分である。このことに関連して、速水・木野・高木（2004）は自己有能感という概念を指摘している。それは、自己の自尊感情を捉えるために自尊感情の対極として他者軽視の視点を入れて両側面から自尊感情をより具体的に捉えるものであり、自尊感情と他者軽視の2軸を基として自己有能感を4類型に分類している。それは、全能型（「自尊感情」「他者軽視」共に高い）、自尊型（「自尊感情」高く「他者軽視」低い）、萎縮型（「自尊感情」「他者軽視」共に低い）、仮想型（「自尊感情」低く「他者軽視」高い）である。この4類型に基づいて他者に対する認知の仕方の中でも、仮想型に焦点を当てた研究が多くみられる。それは特に仮想的有能感として、低い自尊感情を補償しようとして他者軽視を行う特性に焦点を当てたものであり問題行動の要因として考えられるからである。このような視点からいじめを行う場合の一つの要因として検討されている（例えば、今野・吉川・会沢, 2014; 松本・山本・速水, 2009）。

上述の4類型に基づく問題行動の原因を探ることにより今後も幅広く多くの成果が期待されることである。その一方で、4類型を構成する自尊感情と他者軽視の両極を同時に扱う自己有能感そのものがどのような要因により形成されるのか、ということについての検討がなされていない。その中でも尾形・増南（2019）は児童期のつらい出来事、しつけに対する親の関わりが青年の自己有能感とどのような関連性を有するのか検討を加えている。それによれば、つらい出来事よりもしつけとの関係において関連性が確認されている。具体的には、父親・母親がしつけを通してほめる場合「自尊型」が「仮想型」よりも高く、父親・母親ともにけなす場合は「全能型」「仮想型」が「自尊型」よりも高いことを指摘している。つまり一つの行動ルールを学び身につけて行くしつけという過程の中でその

努力や成果、達成感を父親・母親から受け入れられ場合に「自尊型」が高いことが示され、逆に受け入れられない場合に「全能型」「仮想型」が強いという結果が得られている。「全能型」「仮想型」ともに他者軽視が強い特徴を有しており、幼い時期の親の受容的な関わり的重要性が示されているとも考えられる。

自尊感情の形成要因については既述のように親、友人、教師のポジティブな関わり的重要性が指摘されているが、他者軽視そのものについてはさらに分析検討が必要である。

このような視点に基づいて本研究では、自尊感情と他者軽視を含めた自己有能感を取り上げ、その形成に関わる要因を探る。

尾形・増南（2019）の報告に示されているように児童期の親によるしつけにおいて、親から認められない場合に他者軽視の得点が高いことが示されている。また、しつけにおいても子どもが努力し達成出来た場合に親からほめられるとそれが自尊感情形成に関連して来るのであるが、ほめることは賞賛を意味するものである。したがって、ここでは特に、しつけと賞賛に焦点を当てることにする。

また、子どもの発達的な視点に立つと幼児期から児童期にかけて自我の発達に向けて自律性や自発性、勤勉性が課題として生じ、自らいろいろなことに取り組もうとする時期でもある（Erikson, 1959）。この積極的に取り組もうとする時期は、子どもが取り組んで行った行動、努力そして結果に対する評価は達成感、動機づけなどへの影響をもたらすと同時に自己の評価にも繋がるものであり重要な位置づけを持つ。とりわけ子どもと強いつながりを持つ親、教師からの「賞賛」「しつけ」は重要であると考えられる。

以上の視点に基づいて本研究では、幼児期から児童期における親の子どもへのしつけ、親と教師の賞賛と自己有能感との関連性について、大学生を対象として回想法に基づいて検討を加えることを目的とする。

方法

1. 調査対象者

埼玉県のア大学の学生167名 [1年生65名, 2年生85名, 3年生7名, 4年生10名], 平均年齢18.91歳。

2. 調査用紙

(1) 幼児期の父親・母親によるしつけを調べる24項目（園田, 2013）。父親・母親共に同じ項目からなる。

(2) 幼児期から児童期にかけて父親・母親・先生からの賞賛を調べる15項目（渡邊・藤井, 2020作成の18項目から「試合に勝ったことをほめられた」「クラスのためになることをしたことをほめられた」「運動や勉強を教えてあげたことをほめられた」「本をたく

さん読むことをほめられた」「やさしいね・おもしろいね、をほめられた」を除外し「ほめるよりも、叱ったり注意することが多かった」「あなたが失敗したときでも、頑張ったことをほめた」の2項目を加えた15項目)。父親・母親・先生共に同じ項目からなる。

(3) 自尊感情を調べる10項目。Rosenberg (1965)による自尊感情尺度の日本語版(山本・松井・山城, 1982)を用いた。

(4) 仮想的有能感尺度(11項目)。速水ら(2004)が開発した仮想的有能感を測定する尺度の改訂版(Hayamizu, Kino, Takagi & Tan, 2004)を用いた。この尺度は他者軽視の測定に用いる。

(1)～(4)の質問紙は全て4段階評定。

3. 調査時期

2021年5月 講義を通して調査の趣旨と内容を説明し、協力を承諾してくれた学生に講義後質問紙を配布し、後に回収した。

4. 倫理的配慮

説明にあたり、研究の目的、個人情報保護、個人的に見るものではなく全体の傾向を見るものであること、またデータ入力後アンケート用紙はシュレッダーで処理すること、コンピューターに入力したデータは外部との接続が無いことなどを伝え、守秘義務に基づき迷惑をかけない旨説明を行った。

結果

1. 質問紙の構造化

(1) 幼少期のしつけの質問紙

父親・母親それぞれに因子分析(最尤法, プロマックス回転)を実施し、因子負荷量.35以上を有する項目を基準として3因子抽出した。父親母親共に各因子順番に「自己促進的しつけ」「指示的しつけ」「援助的しつけ」と命名した。また α 係数は順に、.776(.780), .805(.798), .720(.643)であり(Table1, Table2参照)高い内的整合性が確認された。()は母親。

(2) 幼少期の賞賛の質問紙

幼少期のしつけの場合と同様の手法と手続きに基づいて因子分析を実施し、父親・母親・先生それぞれ2因子抽出した。父親は「挑戦・頑張り・友人援助への賞賛」「成果への賞賛」、母親は「努力と頑張りへの賞賛」「成果への賞賛」、先生は「個性・技術・成果への賞賛」「上達・友人援助・頑張りへの賞賛」と命名した。それぞれの α 係数は、.853～.938であり高い内的整合性が確認された。(Table3, Table4, Table5参照)。

(3) 自尊感情を測定する質問項目

自尊感情については、下記の10項目からなる。

①私は自分に対して肯定的である。

②私は、人並みには価値のある人間である。

③私はもっと自分自身を尊敬できるようになりたい。(*)

④自分が全くダメな人間だと思うことがある。(*)

⑤私はいろいろな良い素質を持っている。

⑥私は何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う。(*)

⑦私は物事を人並みには、うまくやれる。

⑧自分には、自慢できるところはあまりない。(*)

⑨私は自分のことを敗北者だと思うことがよくある。(*)

⑩私はだいたいにおいて、自分に満足している。

以上の10項目の α 係数は.817であり、内的整合性が高いことが確認された。(*)は逆転項目を示す)。

(4) 仮想的有能感を測定する質問紙

仮想的有能感については下記の11項目からなる。

①自分の周りには気のきかない人が多いと思う

②自分の意見が聞き入れてもらえなかった時、相手の理解が足りないと感じる。

③自分の代わりに大切な役目をまかせられるような有能な人は、私の周りにはいない。

④他の人の仕事をみていると、手際が悪いと感じる。

⑤世の中には、常識のない人が多すぎる。

⑥話し合いの場で、無意味な発言をする人が多い。

⑦知識や教養がないのに偉そうにしている人が多い。

⑧世の中には、努力しなくても偉くなる人が少なくない。

⑨他の人に対して、なぜこんな簡単なことがわからないのだろうと感じる。

⑩今の日本を動かしている人の多くは、たいした人間ではない。

⑪他の人を見ていると「ダメな人だ」と思うことが多い。

以上11項目の α 係数は.887であり、高い内的整合性が確認された。

自尊感情と仮想的有能感それぞれの平均得点を算出したところ、2.64と2.04でありこれを基準として自己有能感について4群を設定した。それは、全成型(42名)('自尊感情」「他者軽視」とともに平均値以上)、自尊型(44名)('自尊感情」平均値以上「他者軽視」平均値未満)、萎縮型(39名)('自尊感情」「他者軽視」とともに平均値未満)、仮想型(42名)('自尊感情」平均値未満「他者軽視」平均値以上)である。

2. 父親・母親のしつけと自己有能感との関連

父親と母親のしつけが子どもの自己有能感とどのような関連性を有するのであろうか。ここでは、父親と母親のしつけについて、子どもの性別×自己有能感(4類型)を独立変数、しつけの各因子得点を従属変数とする2要因分散分析を行った(Table6)。自己有能感については男子と女子を合わせて処理した。また、自己有能感の主効果が確認された場合に4群間の下位検定(Tukey法)を行いTable7に結果を示した。

Table6に示されるように、父親の場合「自己促進

Table1 父親のしつけについての因子分析結果（最尤法, Promax 回転後）

	Fac1	Fac2	Fac3
自己促進的しつけ ($\alpha = .776$)			
10.あなたが夜中にトイレに行くとき、一人で行かせた	.730	-.096	-.216
13.その日に着る服を自分で決めさせていた	.660	-.128	.134
9.脱いだ服は、自分で片付けさせていた	.634	.013	.202
12.園に持って行くものは、親が点検しないで手伝ったり、一人で用意させることが多かった	.558	.000	-.159
11.あなたにお手伝いさせていた	.495	.127	.314
8.お風呂では一人でかたに体を洗わせることが多かった	.474	.144	-.071
16.短時間ならあなた一人で留守番をさせた	.464	.094	-.223
指示的しつけ ($\alpha = .805$)			
3.あなたに「～してはいけない」と言うことが多かった	-.143	.894	.066
1.「～しなさい」と指示することが多かった	.058	.748	.058
4.ぐずぐずしたりまごまごしていると早くするように言う	-.012	.682	.159
2.ほめるよりも、叱ったり注意することが多かった	.085	.617	-.161
6.あなたを、兄弟や友達と比較した	.271	.368	-.191
援助的しつけ ($\alpha = .720$)			
15.親はあなたが自分について話すのをきちんと聞いた	.073	-.242	.621
19.食事では魚や肉など食べやすいようにきってくれた	-.219	.061	.544
5.あなたが失敗したときでも、頑張ったことをほめた	-.033	-.041	.533
24.あなたが友達と遊ぶとき、けんかせず仲良く遊ぶように注意したり、誘導していた	.005	.280	.507
20.入園前に他の子どもと遊ばせてくれた	.016	-.012	.498
22.同じ園以外の子とも遊ばせてくれた	.064	-.058	.494
14.あなたに自分の考えを言わせるようにしていた	.387	.010	.446
17.親はあなたが失敗したり、間違わないように手を貸した	-.050	.134	.369
因子相関	Fac1	Fac2	Fac3
	Fac1		
	Fac2	.366	
	Fac3	-.057	-.242

的しつけ」のみ自己有能感主効果が確認されたが「指示的しつけ」「援助的しつけ」には確認されなかった。

「自己促進的しつけ」において、性別主効果が確認されたが交互作用は有意ではなかった。性別主効果については男子が女子よりも有意に高いことが示された ($F(3,159) = 9.68, p < .01$)。また、自己有能感の下位検定を行ったところ「全能型」と「仮想型」が「萎縮型」よりも有意に高いことが確認され (Table7)、「他者軽視」が共通して高いことが示唆された。また、「指示的しつけ」においても性別主効果がみられたが男子が女子よりも有意に高いことが示された ($F(3,159) = 4.44, p < .05$)。

母親のしつけについては「自己促進的しつけ」において性別主効果がみられ男子が女子よりも有意に高かった ($F(3,159) = 6.83, p < .05$)。「指示的しつけ」では交互作用が確認されたので ($F(3,159) = 2.83, p < .05$) 下位検定を行い、自己有能感の各水準の単純主効果をみたところ、自尊型において有意差がみられ男子が女子よりも1%水準で有意に高いことが示された。また、性別について男女それぞれの自己有能感の差をみたところ、男子において全能型が萎縮型よりも5%水準で、自尊型は仮想型、萎縮型よりもそれぞれ5%、1%水準で高いことが示された (Figure1)。以上のことから、母親の場合男子において「自己促進

的しつけ」「指示的しつけ」が影響力を持ち、「指示的しつけ」はさらに「全能型」「自尊型」と関連性を有することが示された。

3. 父親・母親・先生の賞賛と自己有能感との関連

父親、母親そして先生による賞賛が子どもの自己有能感にどのような影響を持つのであろうか。ここでは、父親・母親・先生それぞれの賞賛について、子どもの性別×自己有能感(4類型)を独立変数、賞賛の各因子得点を従属変数とする2要因分散分析を行った (Table8)。自己有能感については男子と女子を合わせて処理した。また、自己有能感の主効果が確認された場合に4群間の下位検定 (Tukey法) を行い Table9 に結果を示した。

Table8に示すように、母親の場合「成果への賞賛」において性別主効果が確認されたが女子が男子よりも有意に高かった ($F(3,159) = 3.99, p < .05$)。また、父親、先生において自己有能感に有意な(または傾向)主効果がみられたものの、有意な交互作用は確認されなかった。主効果に関して具体期には、父親の場合「挑戦・頑張り・友人援助への賞賛」「成果への賞賛」において確認された。下位検定の結果、「自尊型」と「萎縮型」が「仮想型」よりも有意に高いことが示された。また、「成果への賞賛」では「自尊型」が「仮想型」

Table2 母親のしつけについての因子分析結果（最尤法, Promax 回転後）

	Fac1	Fac2	Fac3
指示的しつけ(α = .798)			
2.ほめるよりも、叱ったり注意することが多かった	.763	.000	-.089
1.「～しなさい」と指示することが多かった	.735	.087	.109
4.ぐずぐずしたりまごまごしていると早くするように言う	.692	.024	.039
3.あなたに「～してはいけない」と言うことが多かった	.649	-.016	-.208
6.あなたを、兄弟や友達と比較した	.523	.214	-.108
23.あなたは一人でさせると遅くなったりうまくできなかつたりするので親は手伝うことが多かった	.473	-.301	.068
21.あなたがやろうとしていることがうまく出来そうにないときは、親はやめるように促していた	.426	.058	-.034
24.あなたが友達と遊ぶとき、けんかせず仲良く遊ぶように注意したり、誘導していた	.366	-.053	.278
自己促進的しつけ(α = .780)			
13.その日に着る服を自分で決めさせていた	.042	.674	.023
10.あなたが夜中にトイレに行くとき、一人で行かせた	.045	.631	-.124
9.脱いだ服は、自分で片付けさせていた	-.004	.611	.179
11.あなたにお手伝いさせていた	.034	.582	.220
12.園に持って行くものは、親が点検しないで手伝わったり、一人で用意させることが多かった	-.121	.568	-.159
8.お風呂では一人でかに体を洗わせることが多かった	.149	.544	.017
16.短時間ならあなた一人で留守番をさせた	.000	.455	-.217
援助的しつけ(α = .643)			
14.あなたに自分の考えを言わせるようにしていた	.001	.398	.607
15.親はあなたが自分について話すのをきちんと聞いた	-.213	.030	.556
17.親はあなたが失敗したり、間違わないように手を貸した	.259	-.086	.468
5.あなたが失敗したときでも、頑張ったことをほめた	-.102	.000	.460
20.入園前に他の子どもと遊ばせてくれた	-.064	-.035	.442
19.食事は魚や肉など食べやすいようにきってくれた	.082	-.366	.432
因子相関	Fac1	Fac2	Fac3
	Fac1		
	Fac2	.129	
	Fac3	-.252	-.202

よりも有意に高いことが示された。先生の場合には「上達・友人への援助・頑張りへの賞賛」において有意な主効果が確認されたので下位検定を行ったところ、「自尊型」が「仮想型」よりも有意に高いことが示された。また、母親の場合「努力と頑張りへの賞賛」で自己有能感に有意な傾向がみられたので下位検定を実施したところ、「自尊型」が「仮想型」よりも有意に高いことが確認された (Table9)。

以上のことから、父親・母親と先生の賞賛は自尊型を主とする自己有能感と強い関連性を有することが示され、特に子どもの成長や物事へ取り組む姿勢、良好な友人関係形成を中心とした側面に強くみられている。このことから、子どもの自尊型を中心とする自己有能感の成長には子どもの取り組みに対する時間的な流れも含めた継続的な親や教師の肯定的な関わりの重要性が示唆されている。

考察

ここでは結果に示した順に沿って親のしつけ、また親と教師による賞賛が自己有能感とどのような関連性を有するのか順に考察を加える。

父親・母親のしつけと自己有能感との関連については、まず父親についてみた場合「自己促進的しつけ」は有意な効果を持つことが示されている。発達のみにて、幼児期はErikson (1959) の指摘にもあるように、自分でいろいろなものに関心を持ち取り組み生活習慣を身に付けようとする時期でもあり、子どもによる成果に対しての親の賞賛や受け入れは子ども自身の自己の能力の確認、動機付けなどにおいて重要な意味を持つと考えられる。しかし、本研究で扱っている「自己促進的しつけ」は親が全然関わらないで子ども任せにする面も含むもので、子どもにやらせてその後のことに親は関わらないという色彩が強い。したがって、本研究で扱った「自己促進的しつけ」では子どもの達成感や動機付けを十分に育てているとはいえないと思われる。また、自己有能感の下位検定について確認したところ、「全能型」と「仮想型」が「萎縮型」よりも有意に高いことが示されており、「自尊型」との有意差が確認されていない。「全能型」と「仮想型」では自尊感情は平均値未満であるものの他者軽視が平均値以上であり他者軽視が共通して高く、他者との比較の優劣にこだわる面が強い。またこれと関連して、「自己促進的しつけ」には子ども自身が自ら身の回りの課題がで

Table3 父親の賞賛についての因子分析結果（最尤法, Promax 回転後）

	Fac1	Fac2
挑戦・頑張り・友人援助への賞賛($\alpha = .938$)		
15.新しいことにチャレンジしてほめられた	.882	-.069
5.あなたが失敗したときでも頑張ったことをほめられた	.874	.009
3.困っている友達を助けてほめられた	.834	-.050
1.最後まであきらめずに努力したことをほめられた	.834	-.087
4.できなかったことができるようになってほめられた	.830	.019
6.人の嫌がる係や仕事を引き受けたことをほめられた	.710	.104
8.運動が出来ることをほめられた	.637	.143
7.掃除を頑張ったことをほめられた	.629	.212
13.むずかしい問題が解けたことをほめられた	.579	.218
14.髪型や服装をほめられた	.547	.122
成果への賞賛($\alpha = .862$)		
10.字や絵が上手なことをほめられた	-.169	1.031
9.作品(図工の作品や自由研究)が上手なことをほめられた	.160	.726
11.歌や演奏が上手なことをほめられた	.222	.588
因子相関	Fac1	Fac2
	Fac1	
	Fac2	.679

Table4 母親の賞賛についての因子分析結果（最尤法, Promax 回転後）

	Fac1	Fac2
努力と頑張りへの賞賛($\alpha = .925$)		
1.最後まであきらめずに努力したことをほめられた	.910	-.126
5.あなたが失敗したときでも頑張ったことをほめられた	.871	.018
4.できなかったことができるようになってほめられた	.811	-.023
3.困っている友達を助けてほめられた	.759	-.031
15.新しいことにチャレンジしてほめられた	.734	.060
8.運動が出来ることをほめられた	.692	.075
6.人の嫌がる係や仕事を引き受けたことをほめられた	.664	.091
7.掃除を頑張ったことをほめられた	.636	.169
13.むずかしい問題が解けたことをほめられた	.416	.342
成果への賞賛($\alpha = .853$)		
10.字や絵が上手なことをほめられた	-.120	.937
9.作品(図工の作品や自由研究)が上手なことをほめられた	.031	.811
11.歌や演奏が上手なことをほめられた	.140	.673
因子相関	Fac1	Fac2
	Fac1	
	Fac2	.658

きることに焦点を当てており、自己の取り組みによる成果の可否にこだわった意識に傾く傾向が強くなる面もあり、このことが他者軽視という自己に焦点を当てた自己有能感形成に関連しているとも考えられる。

一方、「指示的しつけ」の場合、親の都合により子どもができることへの期待、失敗回避、時間のロスなど無駄なことがないように取り組み、必ずしも子どもの立場に立脚した関わり方とはいえない面が強く、基本的には子どもの自尊感情と他者軽視の両面についてバランスの取れた自己有能感を成長させる要素が少ないとも思われる。同様に「援助的しつけ」においては子どもが自主的に関わろうとすることに親が先回りして介入し過ぎ、子どもの自主性を削ぐことになると考

えられる。このことが自己有能感形成に影響がみられないと考えられる。

また母親のしつけについては「自己促進的しつけ」「指示的しつけ」それぞれにおいて「自己有能感」に有意な（傾向）効果を示しているものの、「自己有能感」の下位検定では4群間に有意な差が確認されていない。しかし、「指示的しつけ」では交互作用がみられた。下位検定の結果では、「自尊型」において男子が女子よりも高く、また男子において「全能型」が「委縮型」よりも、「自尊型」は「仮想型」「委縮型」よりもそれぞれ高いことが示され全般的に男子において効果が確認されている。この結果から、母親の「指示的しつけ」は特に男子の「自尊型」「全能型」形成に関連してい

Table5 先生の賞賛についての因子分析結果（最尤法, Promax 回転後）

	Fac1	Fac2
個性・技術・成果への賞賛(α = .896)		
14.髪型や服装をほめられた	.873	-.261
11.歌や演奏が上手なことをほめられた	.714	-.031
12.テストで酔い点数を取ったときほめられた	.671	.046
13.むずかしい問題が解けたことをほめられた	.660	.118
15.新しいことにチャレンジしてほめられた	.643	.113
10.字や絵が上手なことをほめられた	.599	.033
7.掃除を頑張ったことをほめられた	.590	.179
9.作品(図工の作品や自由研究)が上手なことをほめられた	.530	.166
6.人の嫌がる係や仕事を引き受けたことをほめられた	.512	.228
8.運動が出来ることをほめられた	.452	.245
上達・友人援助・頑張りへの賞賛(α = .853)		
4.できなかったことができるようになってほめられた	-.145	1.079
3.困っている友達を助けてほめられた	-.078	.797
5.あなたが失敗したときでも頑張ったことをほめられた	.174	.683
1.最後まであきらめずに努力したことをほめられた	.326	.464
因子相関	Fac1	Fac2
	Fac1	
	Fac2	.680

Table6 しつけについての性別×自己有能感4群による2要因分散分析の結果（F値）

	全能型		自尊型		仮定型		萎縮型		性別主効果	自己有能感主効果	交互作用
	男(18) M(SD)	女(24) M(SD)	男(16) M(SD)	女(28) M(SD)	男(17) M(SD)	女(25) M(SD)	男(13) M(SD)	女(26) M(SD)			
(父親) 自己促進的しつけ	2.48(.81)	2.08(.49)	2.32(.62)	1.84(.49)	2.53(.66)	2.10(.82)	1.84(.67)	1.88(.50)	9.68**(男>女)	4.15**	1.35
(父親) 指示的しつけ	2.18(.66)	2.03(.76)	2.49(.76)	1.80(.49)	2.26(.77)	2.14(.78)	1.86(.56)	1.88(.70)	4.44*(男>女)	1.55	0.2
(父親) 援助的しつけ	2.85(.55)	2.84(.47)	2.93(.67)	3.07(.56)	2.78(.55)	2.67(.63)	2.83(.64)	2.71(.57)	.07	1.82	.41
(母親) 自己促進的しつけ	2.53(.74)	2.18(.54)	2.39(.59)	1.89(.54)	2.50(.62)	2.22(.74)	2.01(.76)	2.08(.56)	6.83**(男>女)	2.34†	1.36
(母親) 指示的しつけ	2.50(.58)	2.26(.50)	2.77(.49)	2.26(.52)	2.35(.65)	2.43(.74)	2.04(.38)	2.25(.70)	1.51	2.45†	2.83*
(母親) 援助的しつけ	3.02(.40)	3.00(.49)	3.06(.79)	3.28(.54)	2.97(.59)	2.89(.52)	2.99(.61)	3.03(.51)	.22	1.35	.54

†p<.10 *p<.05 **p<.01

Table7 自己有能感の4群の父親・母親によるしつけの平均値の比較

	I:全能型(42)	II:自尊型(44)	III:仮定型(42)	IV:萎縮型(39)	F検定	多重比較(Tukey)
	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)		
(父親) 自己促進的しつけ	2.25(.67)	2.02(.58)	2.28(.78)	1.87(.55)	F(3,159) = 4.15**	I・III>IV*
(父親) 指示的しつけ	2.10(.72)	2.10(.68)	2.20(.77)	1.88(.65)	F(3,159) = 1.55	
(父親) 援助的しつけ	2.85(.50)	3.02(.60)	2.71(.59)	2.75(.59)	F(3,159) = 1.82	
(母親) 自己促進的しつけ	2.33(.65)	2.07(.60)	2.33(.70)	2.10(.62)	F(3,159) = 2.34†	
(母親) 指示的しつけ	2.36(.54)	2.44(.56)	2.40(.70)	2.18(.61)	F(3,159) = 2.45†	
(母親) 援助的しつけ	3.01(.45)	3.20(.64)	2.92(.54)	3.02(.54)	F(3,159) = 1.35	

†p<.10 *p<.05 **p<.01

ることが推測される。

以上のように母親では「指示的しつけ」において「自己有能感」に有意な傾向の効果がみられ、父親と母親のしつけは異なる結果を示しているといえる。これは子どもの幼少期からの父親と母親の関わり方の時間的・質的相違が関連している面もあると考えられる。一般的に子どもが幼い時期から父親以上に育児に関わり愛着関係を主体とした親子関係を形成する一方で、日常の時間帯において母親は育児時間が父親以上に多く(内閣府, 2016)、また、小山・森山・小林・長谷川・丸山(2014)は妊娠期から生後4か月までの縦断的研究から、乳児の感情や生理的な状態を制御するのを助け、乳児の合図の微妙な差異を読み取り、正確で相応しい反応、子どもの発達的な興味や能力の理解に関す

る sensitivity の調査行なっている。その結果、母親の方が父親よりも高いが父親でも少人数ながらも授乳や着替えの回数が多い場合に sensitivity が上昇している。この指摘からは子どもが幼少期に母親の sensitivity が父親以上に発達するとしている。しかも子どもの生活に関連する事柄に父親以上に子どもとの会話時間が長く(内閣府, 2015)、父親よりも関心を持つことが指摘されている。このような指摘から考えると、母親の「指示的しつけ」が父親以上に有効に影響しているとも考えられる。したがって父親の場合は関わり方の時間や関わり方の質の相違などを視点に置くと、「指示的しつけ」よりも子どもの立場に立った「自己促進的しつけ」がより必要でかつ有効であると考えられる。このような背景が本研究の結果に反映してい

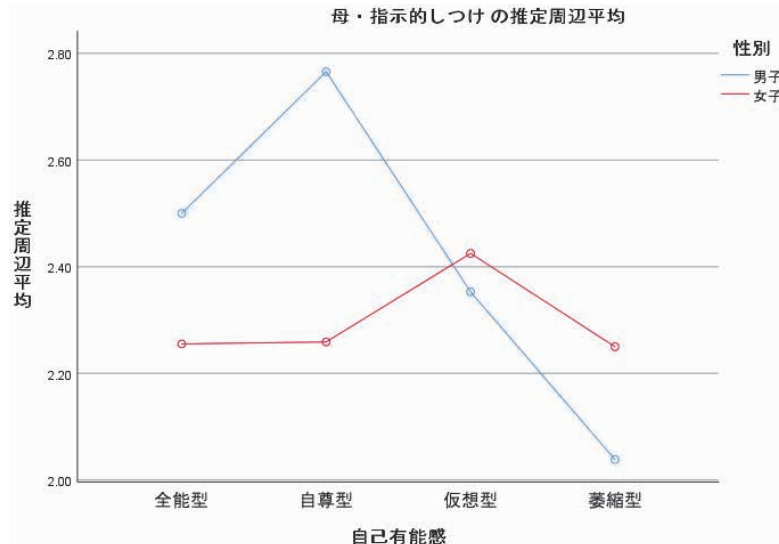


Figure1 母親の「指示的しつけ」における交互作用の結果

Table8 賞賛についての性別×自己有能感4群による2要因分散分析の結果 (F値)

	全能型		自尊型		仮想型		萎縮型		性別主効果	自己有能感主効果	交互作用
	男(18)	女(24)	男(16)	女(28)	男(17)	女(25)	男(13)	女(26)			
(父親)											
挑戦・頑張り・友人援助への賞賛	3.00(.72)	2.97(.75)	3.13(.53)	3.22(.65)	2.79(.79)	2.49(.85)	3.28(.84)	3.05(.83)	.95	4.32**	.56
成果への賞賛	2.46(.92)	3.07(.90)	2.96(.97)	3.24(.75)	2.57(.67)	2.71(.93)	3.08(.85)	3.11(.82)	3.79†	2.95*	.83
(母親)											
努力と頑張りへの賞賛	3.22(.63)	3.16(.73)	3.31(.45)	3.35(.60)	2.95(.71)	2.88(.77)	3.36(.81)	3.09(.82)	.64	2.50†	.32
成果への賞賛	2.70(.91)	3.26(.77)	3.04(.93)	3.40(.68)	2.73(.68)	2.97(.89)	3.15(.85)	3.05(.91)	3.99*(女>男)	1.47	1.04
(先生)											
個性・技術・成果への賞賛	3.16(.55)	3.08(.58)	3.13(.53)	3.26(.63)	2.90(.71)	2.90(.76)	3.21(.58)	2.97(.60)	.18	1.57	.58
上達・友人援助・頑張りへの賞賛	3.50(.57)	3.22(.65)	3.47(.46)	3.58(.45)	3.09(.71)	3.05(.82)	3.33(.69)	3.44(.54)	.06	3.86*	.35

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

Table9 自己有能感の4群の父親・母親・先生による賞賛の平均値の比較

	I:全能型(42)		II:自尊型(44)		III:仮想型(42)		IV:萎縮型(39)		F検定	多重比較(Tukey)
	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)				
(父親) 挑戦・頑張り・友人援助への賞賛	2.98(.73)	3.18(.61)	2.61(.83)	3.13(.83)	F(3,159) = 4.32**		II > III**, IV > III*			
成果への称賛	2.81(.95)	3.13(.84)	2.65(.83)	3.10(.82)	F(3,159) = 2.95*		II > III*			
(母親) 努力と頑張りへの賞賛	3.19(.68)	3.34(.55)	2.91(.74)	3.18(.82)	F(3,159) = 2.50†		II > III*			
成果への賞賛	3.02(.87)	3.27(.79)	2.87(.81)	3.08(.88)	F(3,159) = 1.47					
(先生) 個性・技術・成果への賞賛	3.11(.56)	3.21(.60)	2.90(.73)	3.05(.59)	F(3,159) = 1.57					
上達・友人援助・頑張りへの賞賛	3.33(.62)	3.53(.45)	3.07(.77)	3.40(.59)	F(3,159) = 3.86*		II > III**			

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

るともいえよう。

またしつけに関する先行研究において尾形・増南(2019)は自己有能感形成との関連性について児童期のしつけに注目し、しつけの中でほめる行為が「自尊型」に強く関連することを指摘している。つまり、しつけに付随する親の肯定的フィードバックの有効性を指摘しているのである。今回の調査では父親の「自己促進的しつけ」だけが自己有能感と関連性を有しており、しつけが自己有能感形成と関連していたとした当初の予想よりも低かった。このことに関しては「自己促進的」しつけの中に親の受け入れや、承認あるいは注意、励ましなどの要素を入れてさらに調査を継続する必要があると考える。

次に、父親と母親そして先生の賞賛と自己有能感の関連についてみる。まず父親の場合、「挑戦・頑張り・友人援助への賞賛」「成果への賞賛」とともに自己有能

感において有意な効果がみられた。下位検定の結果、前者では「自尊型」「萎縮型」が「仮想型」よりも有意に高いことが確認されている。後者の場合は「自尊型」は「仮想型」よりも有意に高く両者ともに「自尊型」が強く関連していることが確認されている。この結果は、自尊感情が高い反面他者軽視が低い特性を持つ個人の形成に対する父親の影響力を示したものと考えられるが、自己肯定感の形成要因として父親の道具的・情緒・共行動が中学生の自己肯定感と強く関連するとした細田・田嶋(2009)の指摘を基本的に支持するものである。また今回の結果は発達の視点からみて、中学生という前段階の幼児期において既に父親の賞賛が子どもの自尊感情形成に影響していることを示すものと考えられる。母親の賞賛については「努力と頑張りへの賞賛」が「自己有能感」に有意な(傾向)の効果がみられたが、下位検定では「自尊型」が「仮

想型」よりも有意に高いことが示されている。同様に先生の場合も「上達・友人援助・頑張りへの賞賛」において類似した結果が得られている。以上の結果から、子どもに対する賞賛は自尊感情が高い反面他者軽視の低い特性を持つ自己有能感形成に関連することが示唆されていると考えられるが、子どもの遂行したことに対する単なるフィードバックではなく、時間をかけて子どもが取り組んだ姿勢や成果、友達との関係の中で展開される行動などについての親や先生の継続的な評価や承認が自己の評価に関連する認知により強い影響力を持つと考えられる。また、これに関連して高井(2011)は、個々の個人の自信形成について「ほめられ経験」「努力・達成経験」「困難克服経験」の3要因の重要性を指摘している。つまり、単なるほめる、達成ということ以上に時間をかけた取り組みの重要性を示唆しており本研究結果の一部と一致していると考えられる。このように考えると、「自尊型」を中心とする自己有能感のあり方は、幼児期からの親・先生などの家庭や学校などの教育場面での時間をかけた継続的な関わりが要因として存在すると考えられる。

引用文献

- Baumeister, R.F., Campbell, J.D., Krueger, J.L., & Vohs, K.D. 2003 Does high self-esteem cause better performance, interpersonal success, happiness, or healthier lifestyles? *Psychological Science in the Public Interest*, 4, 1-44.
- Crocker, J., & Park, L.E. 2004 The costly pursuit of self-esteem. *Psychological Bulletin*, 130, 392-414.
- Erikson, E. 1959 Identity and the life cycle. New York: International Universities Press.
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 2004 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 51, 1-8.
- Hayamizu, Y., Kino, K., Takagi, K. & Tan, E. H. 2004 Assumed-competence based on undervaluing others as a determination of emotions: Focusing on anger and sadness. *Asia Pacific Education Review*, 5, 127-135.
- 細田 絢・田嶋誠一 2009 中学生におけるソーシャルサポートと自他への肯定感に関する研究 教育心理学研究, 57, 309-323.
- 井上清子 2018 両親・教師からの褒められ・叱られ経験と自尊感情の関連についてII 文教大学 生活科学研究 (40), 95-102.
- 今野義孝・吉川延代・会沢信彦 2014 仮想的有能感と自尊感情はいじめにどのように関係するか—大学生における中学時代の想起による— 文教大学人間科学部人間科学研究, 36, 123-131.
- 小山里織・森山雅子・小林佐知子・長谷川有香・丸山笑里佳 2014 父親と母親の sensitivity の発達と育児行動の関連—妊娠期から生後4か月までの縦断的研究—小児保健研究, 第73巻, 第5号, 680-688.
- 松本麻友子・山本将士・速水敏彦 2009 高校生における仮想的有能感といじめとの関連 教育心理学研究, 57, 432-441.
- 森下正康・後藤早紀 2016 児童期の母親の言葉かけと女子大学生の自尊感情や他者信頼: 具体的な場面での言葉かけと特性に関する言葉かけの影響 京都女子大学発達教育学部紀要 (12), 145-154.
- 内閣府 2015 平成27年度子供・若者白書
- 内閣府 2016 男女共同参画白書平成27年版
- 尾形和男・増南太志 2019 青年の自己有能感形成要因と大学生生活—児童期のつらい出来事, しつけに対する親の関りから— 埼玉学園大学紀要, 19, 91-103.
- 小川雅美 1991 PBI (Parental Bonding Instrument) 日本版の信頼性, 妥当性に関する研究 精神科治療学 6, 1193-1201.
- Parker, G. Tupling, H., & Brown, L. B. 1979 A parental bonding instrument. *British Journal of Medical Psychology*, 52, 1-10.
- Rosenberg, M. 1965 Society and the adolescent self-image (Vol.11, p.326). Princeton, NJ: Princeton University press.
- 園田菜摘 2013 幼児の有能感・受容感と母親の自尊感情, しつけ行動との関連 横浜国立大学教育人間科学部紀要II (人文科学), 15, 1-8.
- 高井範子 2011 自信形成要因および自信心の発達の変化—青年期から高齢期を対象として— 健康心理学研究, 24, 1, 45-58.
- 渡邊健二・藤井美成 2020 教師・保護者・友人からの賞賛と自尊感情, 学校適応感との関連 皇學館大学紀要, 58, 1-15.
- 山本真理子 2005 心理測定尺度集I 一人間の内面を探る(自己・個人内過程)—サイエンス社
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究 30, 64-68.
- 山下美実子・石玲・桂田恵美子 2010 大学生の親子関係・自尊感情・生き方志向と子ども時代の両親の養育態度との関連: 過保護という養育態度の検討 関西学院大学臨床教育心理学研究, 31, 21-26.

(2021年9月10日受理)